

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：33804

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350949

研究課題名(和文) 発達障害児の教育に携わる保育士・教師版支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a support program of the nursery teachers edition which participates in education of children with developmental disabilities

研究代表者

伊藤 信寿 (ITO, Nobuhisa)

聖隷クリストファー大学・リハビリテーション学部・准教授

研究者番号：00280206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、発達障害児に対する支援を行っている保育士を対象としたトレーニング・プログラムを作成することである。そして、保育版のトレーニング・プログラムを作成し、5名の保育士に対し、5回実施した。その結果、子どもの行動が変化した。さらに、保育士の子どもの行動に対する満足度得点が向上した。また、アンケート調査より、子どもに対する保育士の認識の変化が認められた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop the training program which made the nursery teachers doing support to a developmental disorder child the subject. And a training program of a nursery teachers edition was made and it was put into effect 5 times to 5 nursery teachers. As a result, child's behavior changed. The degree of satisfaction score to the child's behavior of a nursery teachers improved. A change in recognition of nursery teachers to a child was admitted in a questionnaire.

研究分野：発達障害領域における作業療法

キーワード：発達障害 保育士 トレーニング

1. 研究開始当初の背景

発達障害に対する治療には薬物療法，行動療法，作業療法などがあり，家族を支援するペアレント・トレーニングなどもある．さらに，発達障害児に健全な発達を保障するために幼稚園・保育園，学校も大きな影響力がある．このため教育の失敗が発達障害を増幅させたり長期に固定させてしまったり，さらには二次的障害を生じさせることをも意味する．そのため，発達障害児への適切な学校教育のあり方を探ることがきわめて重要な課題である．

そんな状況の中で，学習における遅れ，集団活動不適応，社会的不適応を呈することが多い発達障害児は，外見上はわかりにくい障害ゆえに，特別な支援を必要としている子どもたちであるという理解がされにくく，同年齢の子どもと同じように行動するよう要求され，教師からの注意や叱責が多くなり，徐々に受け入れてもらえなくなるといった状況が生じやすい．このような教師の誤った対応が，不登校，反社会的行動というような二次的障害の原因となっている場合が少なくない．そのため，発達障害あるいは，その疑いがある子ども達を支援する保育士，教員等が適切に関わることで，二次的な障害を予防できると推測できる．子どもへの支援と同時に，保育士，教員を教育することが重要であると考えられる．

2. 研究の目的

(1) 応用行動分析，感覚統合理論に基づく発達障害児の関わり方を教授する保育士・教員向けのプログラムを開発，実施する．

(2) 保育士，教師向けのプログラムを実施し，その有用性を検討する．

3. 研究の方法

(1) 対象：A 市内にある保育園・幼稚園に在籍し，発達障害あるいは，その疑いのある子どもの療育に関わっている保育士あるいは教員である．研究者が講師を務める保育士・教員を対象とした研修会にて，研究協力を集り，希望のあった5名を対象とした．

(2) 方法

プログラムの作成

行動分析と感覚統合に基づいたプログラムを作成．

プログラムを5名の保育士・教員に実施

保育士・教員に対し，プログラムの効果に関する評価を実施．評価は，カナダ作業遂行測定（Canadian Occupational Performance Measure：以下 COPM），Knowledge of Behavioral Principles as Applied to Children（以下：KBPAAC）を使用した．また，対象者に対しアンケート調査を実施した．子どもの行動の変化に関しては，ビデオ撮影し，視聴することで分析した．

保育士・教員に実施した評価結果を基に，プログラムの有用性を検討．

4. 研究成果

(1) 保育士・教員版のプログラムの作成

応用行動分析と感覚統合理論を基盤にした保育士・教員向けのトレーニング・プログラムを作成した．スケジュールは，1回2時間程度を計5セッション実施．各セッションの内容は表1の通りである．

表1 プログラムの内容

セッション	内容
1	行動分析と感覚統合について（基礎）
2	行動分析と感覚統合について（実践） 対象となる子どもの選定
2と3の間	保育園，幼稚園において，対象となる子どものビデオ撮影
3	ビデオ視聴しながら，参加者で検討 研究者がフィードバック
3と4の間	3で検討した対応方法を園で実践 実践場面をビデオ撮影
4	ビデオ視聴しながら，参加者で検討 研究者がフィードバック
4と5の間	4で検討した対応方法を園で実践 実践場面をビデオ撮影
5	ビデオ視聴しながら，参加者で検討 研究者がフィードバック

セッション1では，応用行動分析と感覚統合の考え方を講義形式で教授する．応用行動分析とは，行動を「先行刺激」，「反応（行動）」，「結果」に分け，行動を分析する方法である．行動がどんな場面で（先行刺激），どんなことが起きて（行動），その結果どのようになったのか（結果）を考えることで，その行動がなぜ起きたのかを知ることができる．そして，先行刺激と結果部分を少し変えることで，行動を修正することを目標とする．

感覚統合は，自分自身の身体の情報や周囲の情報（感覚刺激）を上手く整理して取り入れることが苦手で，混乱している方に対して，遊具や様々な感触を得られる玩具等を使用して，感覚情報を上手く整理して適応行動を引き起こすことを目的とした療法である．例えば，光や音に非常に過敏なため，過剰に反応し落ち着きをなくしてしまう子どもや，触覚が非常に過敏なため，物に触れない，人との接触を避けるような過剰な防衛反応を示す子ども，逆に触覚が鈍麻なために，ボタンや紐の感触がわかりにくく，上手くボタンをはめられない，靴ひもを結べないといった不器用な子ども．あるいは，高さやスピードに対して非常に鈍麻なため，高所のような危険な場所に行きたがったり，過剰に動き回る子どもなど，感覚刺激に対して過剰に過敏あるいは鈍麻なために，問題行動を引き起こしている子どもが少なくない．このような子

どもに対して、遊具等を使用して遊びの中で楽しめる感覚を提供することにより、子どもの感覚情報処理機能の成熟を促し、苦手な部分を育てていくことを目的としたものが感覚統合である。以上のことを、教授する。

セッション2は、事例を紹介しながら実践を学んでいくことで、イメージを持たせることを目的としている。また、参加者に対して、普段関わっている子どもの中から、今回対象となる子どもを決めてもらう。そして、COPMの手続きに従って、対象となる子どもの気になるところを列挙してもらい、その中からひとつ選択し、今回の研修における目標とする。さらに、選択した目標に関する場面を園でビデオ撮影してきてもらう。そして、3セッションにおいて、園で撮影したビデオを視聴し、参加者間で助言し合うことを行う。必要に応じて研究者が助言や内容をまとめる。3セッション終了後から4セッションまでの間に、また園でビデオを撮影する。そして4セッション目で、ビデオ視聴を基に助言をし合う。5セッション目においても同様である。このように、プログラムの初めに基礎を教授し、後半は実践場面を視聴しながらフィードバックを行うよう計画した。

(2)各評価の結果

COPM

5名の対象者の結果を表2に示す。COPMは、ある作業の遂行に対して対象児・者自身の認識が継続的にどのように変化するかを調べることを目的に、Lawらによって作成された個別的尺度である。わが国では吉川らが日本語版として訳したものが使用されている。これは、作業遂行における問題を探し、それぞれの問題の重要度、遂行度、満足度について1から10までの10段階で本人が評定する。得点が高い方が、重要度、遂行度、満足度が高い事を意味する。今回は、子どもの目標行動がどれくらい重要か、それはどれくらい達成されているか(遂行度)、またそれに対して、どれくらい満足しているか(満足度)を対象者である保育士・教員に対し、実施した。

表2 COPMの結果

対象	目標行動	重要度	遂行度	満足度
1	人との距離感	Pre 9	Pre 3	Pre 3
		Post 9	Post 7	Post 7
2	離席を少なく	Pre 9	Pre 2	Pre 2
		Post 9	Post 7	Post 7
3	体の動かし方	Pre 8	Pre 3	Pre 3
		Post 8	Post 6	Post 7
4	叩かない	Pre 8	Pre 2	Pre 2
		Post 8	Post 5	Post 7
5	だまって聞く	Pre 9	Pre 2	Pre 2
		Post 9	Post 5	Post 6

各対象者の目標行動は、プログラムのセッシ

ョン2で決定した。重要度、遂行度、満足度はセッション2とセッション5終了時に実施した。対象1は人との距離感が近いので、「保育士と話す時は、離れて話す」とした。対象2は活動時や昼食時によく離席をしていたため、「昼食時は離席せずに食べる」とした。対象3は体の動かし方がぎこちなかったり、不器用だったため、「体操の時に、自分のエリアから出ずに体操をする」とした。対象4は遊びの中でも友達を叩いてしまうことがあったため、「友達を叩かずに遊ぶ」とした。対象5はクラスの中で先生の話を聞くときに、しゃべってしまうことがあったため、「だまって話を聞く」とした。

結果は、全員において、それぞれの目標行動が重要だと認識していた。さらに、プログラム終了後で、遂行度と満足度の点数が向上していた。対象2と3と4は、子どもの目標行動において、僅かではあるがビデオより修正が確認できた。さらに子どもの目標行動に対する遂行度と満足度における対象者の認識も向上していた。対象1と5は、子どもの目標行動は、顕著な変化は見られなかった。しかし、子どもの目標行動に対する遂行度と満足度における対象者の認識は向上していた。これは、子どもの目標行動が修正されたことも要因としてあるが、対象者が子どもの行動を理解し、受容することに修正されたことも、要因のひとつであると考えられる。

子どもの目標行動の変化

各対象の子どものビデオを撮影し、視聴することにより分析した。

対象1の「保育士と話す時は、離れて話す」は、保育士と子どもが話している場面を撮影し、保育士と子どもとの距離を、1回目の撮影日を基準値として、それより遠いか、近いかを参加者全員が判断し、距離間について評価した。その結果、1回目、2回目3回目とも距離間は変化がなかったと参加者全員が判断した。

対象2の「昼食時は離席せずに食べる」は、ビデオを視聴し、昼食時間内で離席した回数をカウントした。その結果、ビデオ撮影1回目は5回であったが、2回目は3回、3回目は1回と減少していた。

対象3の「体操の時に、自分のエリアから出ずに体操をする」は、体操している間、エリアから足が出た回数をカウントした。その結果、ビデオ撮影1回目は10回であったが、2回目は8回、3回目は5回であった。

対象4の「友達を叩かずに遊ぶ」は、自由時間の時に撮影し、友達を叩いた回数をカウントした。撮影時間は15分間と統一した。その結果、ビデオ撮影1回目は、3回であったが、2回目、3回目は0回であった。

対象5の「だまって話を聞く」は、先生がクラス内で話しをしている時を撮影し、しゃべっている時間を測定した。撮影時間は15分と統一した。その結果、ビデオ撮影1回目は65秒、

2 回目 59 秒，3 回目 75 秒と顕著な改善は見られなかった。

以上のように対象 2，3，4 においては，変化が見られたが，対象 1 と 5 においては，変化は見られなかった。

KBPAC

KBPAC の結果を図 1 に示す。KBPAC は，Dell らが作成した KBPAC を梅津が訳した日本語版である。これは，子どもの養育に応用する行動原理の知識を問う 50 項目の質問紙である。各質問に対し 4 つの選択肢があり，その中から最も適切なものを選ぶ形式である。選択肢には行動変容の原理に基づいた正解が 1 つ含まれており，解答が正解の場合得点として 1 点が加算される。

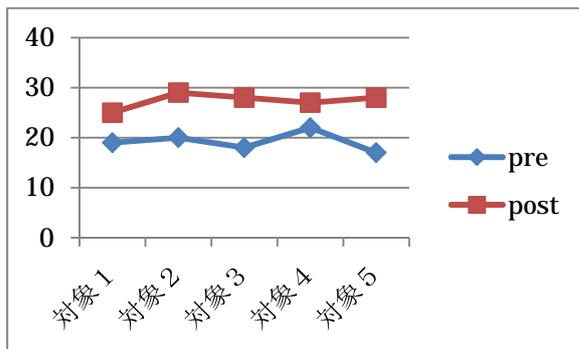


図 1 KBPAC の結果

プログラムの開始前 (pre) とプログラム終了後 (post) に実施した。結果は，5 名の対象者において，開始前と比較して，終了後の方が点数が向上していた。これは，応用行動分析的な考えを基にした関わり方の知識が向上したことを意味する。

アンケート調査

今回のプログラムにおける満足度を対象者に調査した。1 から 10 までの 10 段階で，1 が不満足，10 が満足とした。その結果，3 名が 10 点，1 名が 9 点，1 名が 8 点であり，参加者は概ね満足していた結果となった。

さらに，自由記載で「印象に残っていること」を記載してもらった。その結果，感覚統合的な評価とアプローチの視点が具体的でわかりやすかった，感覚が鈍麻だと人との距離感が近くなる傾向であること，体がじっとしていられず動いてしまう原因と対応がわかったこと，回数を重ねるごとに，子どもができることが増えたこと，多動は刺激を求めていることという回答があった。主には，子どもの問題行動の原因が理解できたという内容が多かった。

また，「今後普段の支援の中で役立つような内容は」という質問に対して，運動の中で行う支援の仕方，子どもへの見方が変わった，子どもの見る視点が広がった，子どもの行動の原因を考えられるようになった，遊び方等，運動面

に関することと，子どもの行動を見る視点の変化という内容が主であった。これは，子どもの問題となる行動に対して，対処療法的な支援ではなく，子どもの行動を理解し，原因を追究するというプログラムの目的に沿ったコメントであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 信寿 (ITO, Nobuhisa)

聖隷クリストファー大学・リハビリテーション学部・准教授

研究者番号：00280206